

『医療政策学校』No.2 (本の泉社、2006年5月)に  
掲載の同名タイトル稿の番外編。2006年3月30日  
(木)脱稿、4月17日(月)了。本文:5,079字。

## 社会科学的認識との出会い

——学生時代の読書の思い出——

### <増補冗舌版>

垣田裕介

ここでは、私が学部学生時代(1994~97年度)に  
経験した「社会科学的認識との出会い」について、  
感銘を受けた思い出深い本を取り上げ、エピソード  
を交えて紹介します。このような回顧的エッセイは、  
多くの場合、ベテランの研究者や高名な学者によっ  
て書かれます。にもかかわらず、教育・研究職に就  
いてわずか3年目の若輩である私が学生時代の経験  
を書くことにしたのは、私よりさらに若手の学生・  
大学院生や、これから大学院に進学される社会人  
の方にとって、わずかでも参考となる点があればと思  
ったためです。

私が学生時代に所属していたのは、同志社大学の  
文学部社会学科に設けられていた産業関係学専攻と  
いうコースでした(2005年度の改組により、現在は  
社会学部産業関係学科)。この「産業関係」とは、英  
語でいえば industrial relations で、しばしば「労使関  
係」とも訳されます。文学部であり、かつ社会学科  
でありながら、このコースで受けた講義科目の主な  
バックグラウンドは経済学でした。例えば、近代経  
済学の入門的講義やマルクス経済学などは、必修科

目とされていました。私は1年次(1994年度)に、  
マルクス経済学の講義に興味を抱き、商品の価値形  
態の説明が進むにつれ、ついに貨幣概念が登場した  
時に感じた面白さは、強く印象に残っています。

3年次(1996年度)以降にゼミや専門的講義を受  
ける中で関心をもつようになったのは、労使関係そ  
のものではなく、いわゆる「企業社会」における労  
働者の労働実態や生活問題でした。3年次後期の履  
修科目(「産業調査実習」)で課された「研究論文」  
では、そうした題材を取り上げました。その課題を  
仕上げる過程で、私は、読書や勉強成果の整理の楽  
しさを知り、作品の質はともかく、400字詰め原稿  
用紙100枚にのぼる「力作」を書き上げました(当  
時は手書き)。また、4年次(1997年度)の卒業論  
文では、少年時代以来の歴史好きを生かして、イギ  
リス社会政策史に関する勉強の成果をまとめました。

このように、私は3年次の頃から社会科学に関す  
る読書や勉強が面白くなり、結果として、社会福祉  
系の大学院へ進学し、大学での教育・研究職に就く  
ことになりました。こうした進路やこれまでの勉強・  
研究のテーマは、学生時代に感銘を受けた以下の  
本と深く関わっているように思います。これらの  
本は、気取っていえば、私の進路や勉強・研究にと  
つての原点となっています。

それでは、以下、学生時代に読んだ順に記載しま  
す。

\* \* \*

1. フリードリヒ・エンゲルス著、全集刊行委員会  
訳『イギリスにおける労働者階級の状態』1・2、  
大月書店(国民文庫)、1971年(原著:1845年)。

2年次(1995年度=偶然にも原著刊行からちょ  
うど150年)の夏休みにレポート課題図書として指定  
され、本書を手取ることになりました。

ちなみに、指定された課題図書は二択で、もう一  
方は『日本の下層社会』(横山源之助著、岩波書店(岩

波文庫)、1985年。初版刊行は1899年)でした。私がエンゲルス著を選んだのは、いま考えればよく分からない理由でした。第1に、横山著より分量の多い、二分冊のエンゲルス著を読んだ方が勉強した気になるだろうと思ったためです。第2に、ほとんどの同級生が横山著を選んだことへの反動もあったように記憶しています。

レポート課題図書として本書を半ば受動的に手にしたとはいえ、19世紀イギリスの労働者の貧困や都市の衛生状態についての、臨場感と迫力にあふれるルポルタージュには大いに引き込まれました。この読書経験は、私のその後の読書や勉強・研究の出発点になっているように思います。大学院生時代には、貧困研究に着手するようになるとともに、上記の『日本の下層社会』や『女工哀史』(細井和喜蔵著、岩波書店(岩波文庫)、1980年。初版刊行は1925年)などを興味深く読むようになりました。特に、大学院博士後期課程1年次(2001年度)に繙いた『女工哀史』の末尾にある次の一節は、胸(脳)に刻まれています。「人類が生きて行く上においては」、「衣服は絶対に必要欠くべからざるものである。そうすれば『糸引き、紡ぎ、織る、編む』の労働はこれをしてしても否定することが出来ない」。「けれども生きるものは万人であって、死ぬるものは実に彼女ばかりだ。万人が生きてゐるためには、彼女を犠牲にせねばならぬという法は断じてありえない」(399頁)。

なお、このエンゲルス著で、私が現在用いているのは、図版が豊富に掲載された岩波文庫版です(一條和生・杉山忠平訳『イギリスにおける労働者階級の状態——19世紀のロンドンとマンチェスター』上・下、岩波書店(岩波文庫)、1990年)。

## 2. 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店(岩波新書)、1989年。

先述の3年次(1996年度)後期に私が初めて書いた「研究論文」において、いわゆる「企業社会」下の労働実態や生活問題を取り上げたときに、本書を

参考文献として読んで勉強しました。

本書によって私は、労働と生活を結びつけて考えることの重要性、そして生活や福祉について考える際には労働のありようを視野に入れる必要のあることを学びました。今でもこの点は、社会福祉を勉強・研究するうえで決定的に重要であると考えています。したがって、学生時代に主に労使関係や労働問題を勉強していた私が、大学院生時代に生活問題や社会福祉を勉強・研究するようになったことについても、周囲が言うほど不自然ではないと思ってきました。

また本書によって、本を読むことで以前とは違った角度や視点で社会をみるができることを痛感しました。そして、読み出したら止まらないという興奮を覚えた、思い出の一冊です。当時に猛烈な勢いで読んだ形跡が、本書への引線とメモとして残っています。

ちなみに本書は、現在勤務している大学で、経済学部の2年生を対象としたゼミ(2005年度前期「2年セミナー」)のテキストとして用いました。

## 3. 内田義彦『読書と社会科学』岩波書店(岩波新書)、1985年。

3年次(1996年度)にゼミの担当教員(三塚武男先生)から薦められ、その後も繰り返して読み続けている一冊。なかでも、「概念」という(私にとっては今でも難解な)コトバを理解するために、特に大学院博士前期課程(1999~2000年度)の時に何度も読み返しました。

これまで最も多く読み返した箇所は、第1部の『読むこと』と『聴くこと』と(1~77頁)と、第3部「創造現場の社会科学——概念装置を中心に」の第2章「社会科学のウルトラ・アイ？」(133~159頁)です。本書は、「です・ます」調の平易な文体で書かれているため読みやすく、そして何より味わいのある内容です。読み返すごとに新たに気づかされたり、あらためて確認させられることも少なくありません。

大学院博士後期課程2年次(2002年度)に『内田義彦著作集』(全10巻、岩波書店、1988~89年)を購入し、その第9巻には本書の内容が収録されていますが、私が座右に置いて読み返しているのは、学生時代からの愛着が沁み込んだ新書版です。

#### 4. カール・マルクス著、村田陽一訳『賃労働と資本』大月書店(国民文庫)、1956年(原著初版:1849年)。

4年次(1997年度)に、内定先の企業への就職か大学院進学への進路変更かを悩んでいた時に読み、大いに感銘を受けた一冊。読んだ日付は、今でも覚えているほどです(7月27日)。私は4年次の5月から大学院生らとの『資本論』読書会に参加するようになり、その読解に挑戦しましたが、そう簡単には内容を理解することができませんでした。そのような経緯もあって入門的な本書『賃労働と資本』を手にとったように思います。本書はさすがに一日で読了することができ、資本主義経済・社会の仕組みについて、もっと勉強したいと思うようになりました。

ちなみに、私が大学院進学を考えるようになったのは、4年次に第一志望企業への就職が内定した(6月6日)直後に、当時モグリ聴講で参加していた京都府立大学福祉社会学部の武元勲先生のゼミで、大阪の釜ヶ崎(「あいりん地区」)を初めて訪れた(6月12日)ことがキッカケになっています。このときに、衣食住に事欠く貧困・窮乏状態を目の当たりにしたことによって、私は大いに衝撃を受け、貧困問題や経済・社会についての勉学意欲を増幅させられました。そして、以下に記すように私の所属が同志社大学から大阪府立大学に移ってからは、本格的に日雇労働者や野宿者の生活実態や福祉政策を対象とした調査研究に携わることになりました。

進路の悩みについては、身近な先生や友人などに相談を繰り返しました。その結果、本書読了から約2週間後に就職内定を辞退し(8月11日)、大学院

進学を目指して急いで受験勉強に取り掛かりました。翌9月に同志社大学の大学院(社会福祉学専攻)の入試を受験しましたが、不合格となりました。それでも、どこかの大学院へ進学して勉強・研究に励もうと決心がついていたので、腰を据えて勉強するために、4年次の後期は龍谷大学社会学部で開講されていた野村拓先生の講義をモグリ聴講しました。それがキッカケとなって、同時期(1997年10月)からは野村先生主宰の「医療史セミナー」(現在の「医療政策学校」)に参加するようになりました。

同志社大学卒業後は、ゼミ担当教員の勧めもあって、大阪府立大学へ移ることにしました。大学院浪人中(1998年度)は社会福祉学部の研究生となり、翌年度(1999年度)に大学院社会福祉学研究科に入学しました。なお、研究生時代の指導教員は里見賢治先生、大学院生時代の指導教員は江口英一ゼミ出身の中山徹先生です。

#### 5. 吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波書店(岩波文庫)、1982年。初版:新潮社、1937年。

本書を読んだのは大学院生時代ですが、大いに感銘を受け、以後つねに座右に置き続けている一冊なので、ここで紹介することにします。本書は、中学生「コペル君」を主人公として、人生を「どう生きるか」という問いを社会科学的認識のあり方と結び付けて書かれた物語です。「人生読本」かつ社会科学入門書として、これまで私が周囲に薦めてきた一冊です。

私が本書を初めて読んだのは、大学院博士後期課程1年次(2001年度)の9月です。大学近くの書店で本書の中古品を200円で入手して一読したのち、周囲の院生・学生たちに貸し回しました。貸し出した院生・学生からの評判が非常に良かったことは、私にとって嬉しいことでした。しかし、なかなか手元に返ってこないのも、もう戻ってこないものと諦めて、2代目を購入しました(数年の歳月を経て、この初代は2006年4月に帰還しました)。しかし結

局その2代目も後輩院生に譲り、現在手元にあるのは2年前に初任給で購入した3代目です。

本書の主人公にちなんで、私が修士論文執筆時(2000年度)から用いていたノートパソコンを「コペル君」と愛称していたことは、友人・知人の間で知られています。しかし不幸なことに、大学院生時代の主要な研究業績執筆の相棒であった「コペル君」は、2004年度に大分大学へ赴任した際に入居した構内宿舎に、台風時の暴風雨が一因となって過電流が通流したことにより(2004年9月7日)、御臨終となりました(施設管理責任者である大学による補償は一切ナシ)。その後ローンで新調したノートパソコンは、学位取得の意欲と念願を込めて「コペル博士」と命名し、現在の私の勉強・研究の相棒として活躍しています。

\* \* \*

以上のように、つい余談へと脱線しつつ、私の読書経験を紹介してきました。その後も、大学院生時代を経て今日に至るまで、研究上の指導・交流や読書、社会調査などを通じて、勉強・研究上の新鮮な出会いや発見を積み重ねています。なお、私の大学院博士前期課程以降の主な入手図書、および博士後期課程以降の日記については、私のホームページ(<http://www.h3.dion.ne.jp/~kakita/index.htm>)で公開しています。

学生時代に、ここで紹介した本を始めとする社会科学書によって唯物論や政治経済学的視点にふれたことは、観念的な「あるべき」論に終始しない社会福祉の教育・研究を進めるためにも、私にとって決定的に重要な経験であったといえます。

(かきた・ゆうすけ／大分大学・講師)